

【佳作】

漫画『蟲師』における自然観

— 主人公ギンコ思想を中心に —

国際日本学部 歴史民俗学科 4年

安西 智也

はじめに

『蟲師』¹は漆原友紀により1999年から講談社『月刊アフタヌーン』にて連載されていた漫画作品である。

蟲師²という仕事を生業とする主人公のギンコが、旅のゆく先々で出会う人々とそれに関わる「蟲」に関する事象と対峙する物語である。「蟲」とは、いわゆる昆虫とは違い、妖怪や霊などのような怪異に近く、見える人と見えない人がいる。作中では「この世のあらゆる命よりも命の源流に近い」とされており、微生物のような姿や花のような姿など様々な姿形で描かれている。各話は一話完結型で描かれ、眠ることを忘れ、少しずつ記憶が失われるなどの奇妙な事象にあう人々とそれを引き起こす「蟲」が中心となる。蟲師という蟲の専門家であり蟲の研究、蟲の影響に対して治療を行う医者のような役割にあるギンコは、それらの事象を起こす蟲を見つけ出し、問題を解決しようとする。各話の終わり方としては、ハッピーエンドともバッドエンドともとれないものが多く、各話の蟲の影響を受けた人々が自分なりの選択をする、失敗から何かを学ぶような構成になっていることが多い。

また、作品内においては蟲の多くが人に悪影響を及ぼすことから、駆除すべき対象として見られており、蟲師のみならず、登場人物の多くが蟲に対して嫌悪感や不気味さを覚えていることが多い。しかし、主人公であるギンコは蟲師でありながら、出来る限り殺さず、蟲を生かしたいと考えており、蟲師の中でも異端な存在であると言える。

本論文では、作品内における蟲とそれにまつわる

人々の事例を挙げ、『蟲師』の世界観を説明した上で、主人公のギンコが、なぜ他の蟲師と異なる、蟲と親しみ、蟲を生かそうという考え方に至ったのかについて以下の順に論じていく。

- I. 蟲と蟲師
- II. 蟲にまつわる人々
- III. 「居場所論」
- IV. ギンコ思想

I. 蟲と蟲師

ギンコ思想について考察する上で、『蟲師』という作品がどういった内容なのかをより詳しく説明し、冒頭に問題として挙げたギンコ思想の異質さについて論じておく必要があるだろう。そこでこの章では、まず漫画『蟲師』の世界観や設定について紹介する。

時代設定や各話で登場する場所に関しては明確に定められてはおらず、「鎖国し続けている日本や江戸と明治の間にもう一つ時代があるイメージ」³と作者から語られている。その言葉通り、作中では美しい原風景が広がり、家屋においても茅葺屋根の日本家屋、服装においてもほとんどの人が和服を着用しており、洋服を着ているのはギンコのみである。

こうした世界観であることで、妖怪や霊、怪異、自然といった超常的な存在を表す「蟲」とそれによって引き起こされる不可思議な現象が不自然なく溶け込む構図になっている。

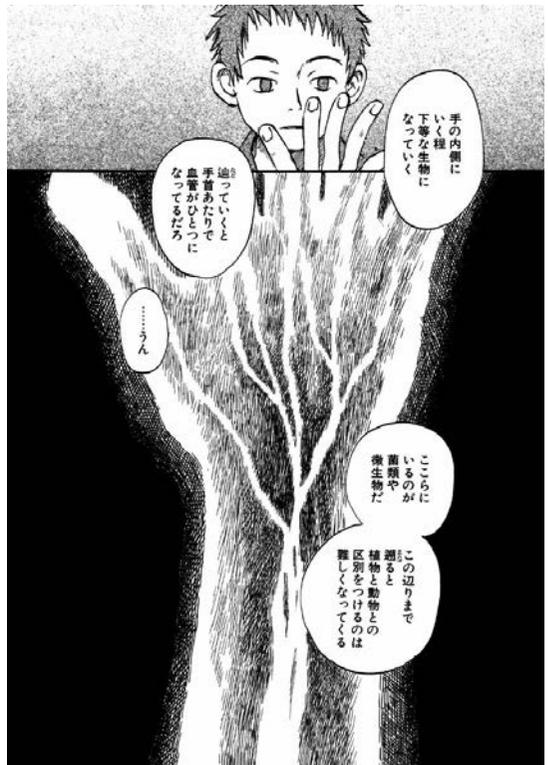
それでは、次に、この作品の核となる部分、「蟲」

について簡単に説明していく。

蟲とは、冒頭にも説明したように『蟲師』の世界に存在する生命である。蟲を見るためには五感で感知しにくいものを感じるために補う「妖質ようしつ」という感覚が必要で、妖質を持たない者はいないものの、赤子の時が一番多く徐々に失われていくことや普段から必ずしも必要でないことから眠っていることが多いため、蟲を見ることのできるものは少ない。そのため作品内に登場する人々の多くは、存在すら知らないことがほとんどである。蟲は我々の身の回りに存在する魚類、爬虫類、哺乳類などの種別とは異なり、作中では、それら様々な生命の大元、生命の原初の形であると説明されている他、「生と死の間にあるモノ」とされ、一般的な生物とは大きく区別されている。

作品内では、ギンコの旅の行く先々で不可思議な現象に合っている人々があり、それらの現象は蟲という生命の営みによって起こっているというのが、この作品における大きな柱となっている。

そして、蟲師は、この蟲について研究・調査することで、蟲の影響を受けた人の治療法や蟲の対処法などの知識を身につけた蟲のエキスパートであり、主人公であるギンコもこれにあたる。蟲を見る事が出来る者自体珍しいため、数は多くないがギンコ以外にも存在し、何代も蟲師を続けている家系、旅をせずの一つの村に留まり、村の人々へと助言する者など蟲師としての在り方も様々である。また、蟲師同士での集まりや情報交換、蟲師の使う道具を売っている店など蟲師間でのネットワークも存在する。蟲の中には、人々の生活を妨げる、果ては死に至らしめるものなども存在するため、蟲師の多くは、蟲をいわば害虫として駆除することを生業としている。しかしながら、前述したとおり、主人公であるギンコは、蟲師でありながら、蟲を極力殺さずに生かそうとする考えを持っており、蟲に対して親しみを持つ者として『蟲師』の中でも異端な存在に描かれている。





20

〔緑の座〕より引用)

II. 蟲にまつわる人々

前の章では、『蟲師』という作品の世界観、設定を簡単に紹介した。それに続きこの章では、本題であるギンコ思想に入る前に、ギンコが旅で出会った人々について触れておくことで、ギンコ思想が他の登場人物とは異なるということをより強調すると同時に、後の章で論じる重要な観点、「蟲との距離感」について述べていきたい。そこでまず、蟲を嫌う人々と蟲に魅かれる人が出る話をそれぞれ紹介し、ギンコ思想との違いを論じていく。

蟲に対して嫌悪感、恐怖を覚える話は「蟲師」の中でもたくさんあるが、今回は「枕小路」を取り上げる。以下がそのあらすじである。

巻1-3⁴ 「枕小路」

百発百中の予知夢を見ると噂の男のもとを訪れたギンコは、予知夢が蟲によって引き起こされており、そのままにすれば増殖し続けて夢か

ら覚めなくなってしまうため、薬を飲んで調節するように勧めて村を後にする。当初はギンコの言われた通り、薬飲んでいていた男だったが、ある日村を襲い、自分の娘を失うこととなった大津波を予知できなかったことから薬を飲むことをやめてしまった。すると予知夢の回数は増え内容もより正確になっていた。しかし、村の人々に指先から青いカビが生え全身に広がり体が崩れていく夢を見た翌日、夢で見た内容が本当になってしまう。実は男に寄生していたのは、夢で見た内容を現実へと持ち出す蟲、夢野間なのであった。

この話では、夢の内容を現実へと持ち出す蟲とそれに寄生された男の顛末が描かれている。ギンコは、当初薬を渡す際に実際は予知夢を見せる蟲ではないということを知っていたが、この蟲を完全に断つことは出来ず、生涯均衡を保ちながら共生していくことしかないと、それゆえ、寄生された者が徐々に自分自身の創り出すものに耐え切れなくなることを知っていたため、男にはあえて話していなかった。しかし、男は自分の見た夢によって妻や村の人々を殺してしまったことからすでに自分自身が死ねばよかったと考えるようになっていた。

ギンコの考え方として『蟲師』の中でもよく描かれるのが、「蟲にも人にも罪は無い」という発想である。これは蟲も人もそれぞれ生命として自身の生を全うしているに過ぎないため、どちらにも非は存在しないという意味であり、どれほど人に害を与える蟲であったとしてもギンコはこの考え方のもと、元凶となる蟲を殺さずに、蟲の影響を受けた人々を助けようとする。しかし、実際に蟲の影響を受けた人々が同じように考えられるかと言えば、当然そうではない。物言わぬ未知の存在が、自分自身の人生を狂わせるからだ。

「枕小路」においては、夢野間を断つ方法を見つけるべくギンコと男が試行錯誤する中、夢野間が男の使っている枕を夢の世界と現実を結ぶ通い路にしている、そこに住み着いていることを知るのだが、男はその瞬間ギンコの制止を振り切り、刀で枕を斬ってしまう。すると枕のみならず男自身にも同じように刀で斬られた傷ができるのである。これは、

「枕」の語源が「魂の蔵」^{たまのくら}から来ているという説によって生まれた話で、枕には夢野間が巣くうと共に、男の魂が宿っていた。男は自分の魂を斬ってしまったことで自分自身にも刀傷が出来てしまったのである。この話では、最後、夢野間によって夢が現実になることはなくなったものの、男は眠ることを恐れ、精神を病んでしまい、自分自身で命を絶ってしまうという終わり方になっている。

それでは、反対に蟲に魅かれる人の話を紹介し、枕小路の男と比較していく。

ここまででも述べた通り作中では、蟲と関わった多くの人が、蟲に対する嫌悪感を抱くことが多いものの、蟲の影響を受けた人でも、ギンコと出会い、ギンコの考え方に触れることで蟲自体に罪は無いという発想、蟲の影響を受けたことで自分なりの学びがあったと前向きに終わる話は珍しくない。中でも、次に挙げる「旅をする沼」ではギンコに会う前から蟲とともに生きる少女が描かれている。

巻1-5 「旅をする沼」

ギンコは山脈を超えている途中、何度も沼を見かけるものの、迂回して振り返るたびにあったはずの沼が跡形もなく無くなっており不思議に思っていた。そんな中、再び沼が現れたとき、沼の水で染めたかのような深い緑色の髪の少女と出会う。少女は、この沼は旅をしており、地中へ潜ったり、浮上したりを繰り返しながら海を目指しているとギンコに語る。少女は、川の氾濫を止める生贄として村を代表して川に飛び込んだ過去があり、ここでもう死ぬのだと諦めていたが、その際に巨大な緑の何かが激流の川を遡り、気がつくとも山あいの沼の淵にいた。少女は、この沼があつた時の巨大な緑の何かであると気づき、自分自身を生かし、居場所をくれた存在として沼と共に旅をしているのであった。

この話では、水蟲^{すいこ}と呼ばれる水によく似た無色透明の液体の蟲が登場する。この蟲は一見水と変わらないものの、誤って飲み続けると常に水に触れていないと呼吸できなくなり、体が透け始めてしまう。それをさらに放っておくとやがて液状化し、体が流

れ出してしまうのである。そして、旅をしている沼はこの水蟲の成れの果てであり、沼は最後の死に場所として子孫を残しながら海へと向かっているのがあった。少女は、自分自身を生かし、居場所を与えてくれた恩義を沼に感じており、ギンコから水蟲の話聞いたうえで、沼の一部となることを決めるが、ギンコは少女を助け出そうと考える。

「蟲の側へ行くということは——普通に死ぬ事とは違う」「蟲とは生と死の間にあるモノだ者のように物でもある 死にながら生きているようなモノ」「それは一度きりの瞬間の死より想像を絶する修羅だとは思わんか」「少しずつ人としての心は摩滅される そんな所へ行こうというのに あいつは最後に見たとき——大事そうに晴れ着を着ていた」「それ以上の酷な事情つてのは……そうあるもんじゃないだろう……」

(「旅をする沼」よりギンコのセリフを抜粋)

ギンコは最終的に海の近くの村へと助けを求め、村の漁師が海に網を張ることで沼の中にいた少女は網にかかって助かる。最後、沼と共に一度海に流れ出た少女は、自分自身が沼に溶けてゆく恐れを感じたものの、沼が死んでゆくを感じると同時に悲しさを覚えるのであった。少女は、その後、海の近くの村で暮らし始め、沼の死骸が流れ出たことで集まった魚を獲りながら、「沼の死んだこの海で、自分の力で生きてゆきたい」と前向きに自身の展望を語る終わりとなっている。

先に挙げた「枕小路」とこの「旅をする沼」では、それぞれ蟲の影響を受けた人々が蟲に対して対照的な感情を抱いている。枕小路の男は、自分自身の人生を狂わされた怒りから、蟲に対する憎悪の感情が強いものの、旅をする沼の少女は生贄として出され、居場所失った中で沼と出会い、生かされたことから蟲に対する感謝が存在する。それと同時に、私が感じるのが「蟲との距離感」である。

蟲を嫌い、蟲という未知のものに対して、まず殺そうという蟲との距離感が遠すぎる人物、つまり枕小路の男や作中に登場するギンコ以外の多くの蟲師たちは、蟲(=未知)を知ろうという発想がなく、「知る」ということに関してはあくまでも「殺すた

め」という前提がつきものである。それゆえに枕小路の男のように、結果的に自分自身を苦しめる選択をとってしまう。反対に、蟲に魅かれ、蟲との距離感が近い、「旅をする沼」の少女のような人物は蟲と一体化、蟲の世界や蟲の生と同調したいという気持ちが生えるが、先ほど抜粋したギンコのセリフの通り、人としての生と蟲としての生は全くの別物であり、蟲に近づきすぎれば、人としての法則を失い、蟲として生きるほかなくなってしまう。

このように、蟲との距離感が遠すぎても、近すぎてもいけない、先の枕小路の男で言えば、ギンコは当初、どうやっても蟲を断てないことを知っていたことから、わざと男をだまし、蟲との共生をさせようとしていた。蟲の生を否定することなく、蟲と人のそれぞれの生を全うさせようとしたのである。このように蟲と適切な距離感を保っているのが主人公のギンコなのである。ギンコの思想が『蟲師』の世界において異端で、周囲の人物から理解されにくいのは、大半の人々が蟲との距離感がうまく取れないためであり、ギンコの思想は異端ではあるものの、蟲との付き合い方において最適なものと言えるだろう。

Ⅲ. 「居場所論」

前章では、蟲を嫌う人々、蟲に魅かれる人々の話を取り上げた上で、「蟲との距離感」という言葉を使い、それぞれの問題点、ギンコの思想について簡単に触れた。この章では次章のギンコの思想を論じる前準備として、思想の背景に大きく関わり、次章で論じる「ギンコの蟲との距離感」にもつながるギンコの幼少期について紹介する。

『蟲師』では、基本的に大人のギンコの旅路が描かれているものの、ギンコがなぜ蟲師になったかという経緯を知ることのできるギンコの幼少期を描いた話が3つある。ここでは、その3つのお話の中で、時系列的に一番古い話、「眇の魚」とギンコが蟲師として生きていくことを決め、旅の始まりとなった「草の茵」を取り上げる。

卷3-5 「眇の魚」

母と共に行商の旅をしていた少年「ヨキ」は旅の途中で土砂崩れにあって母を亡くしてしまう。怪我を負って倒れていたヨキであったが、片目を失った白髪的女性蟲師である「ぬい」に助けられる。怪我が癒えるまでぬいのもとで共に暮らしていたヨキはぬいから山菜や森の中に住まう蟲など様々なことを教えてもらい、二人は互いに親子のような情が生えるのであった。

しかし、ぬいは池に住むトコヤミという蟲、そしてそのトコヤミに住む蟲「銀蟲」が放つ光が生物をトコヤミに変えること、その光を浴び続けた自分もいずれ同化することを隠しており、それを知ったヨキはぬいを引き留めようとするものの、自分もトコヤミに飲まれてしまう。トコヤミから逃れるためには、記憶を失った中で自分に対して、すぐに思いつく名前を付ける必要があることを教えてもらっていたヨキは、トコヤミのなかで目にした銀蟲を自身の名として付ける。久しぶりに陽の光を目にしたヨキにはもうすべての記憶は無く、片目にトコヤミが巣くった、白髪の姿へと変わっていた。「ギンコ」という名前だけを覚えたまま、人里へと保護されるのであった。

卷9-5 「草の茵」

蟲を寄せる体質を持ち、一つ所に留まらず、各地を転々としていたギンコは、あるときスグロという蟲師に助けられる。スグロは他の蟲師に利用されては捨てられ、光脈⁵を統制する山のヌシ⁶などからも警戒されていたギンコを不憚に思い、ギンコが一人でも生きていけるよう蟲師としての知識を教え、しばらくの間面倒を見ることを決める。しかし、そんな中、山を一人歩いていたギンコは次代のヌシの入った卵を割ってしまう。瞬間、山の調子が崩れ始め、焦る中、ギンコは現代のヌシがこちらを見ていることに気付く。逃げるヌシを追いかけていると、ギンコは地下深く光脈の流れる場所へと落ちる。そこでヌシが光脈の河へと入っていくのを見て、自分も同じように行こうとするが、その

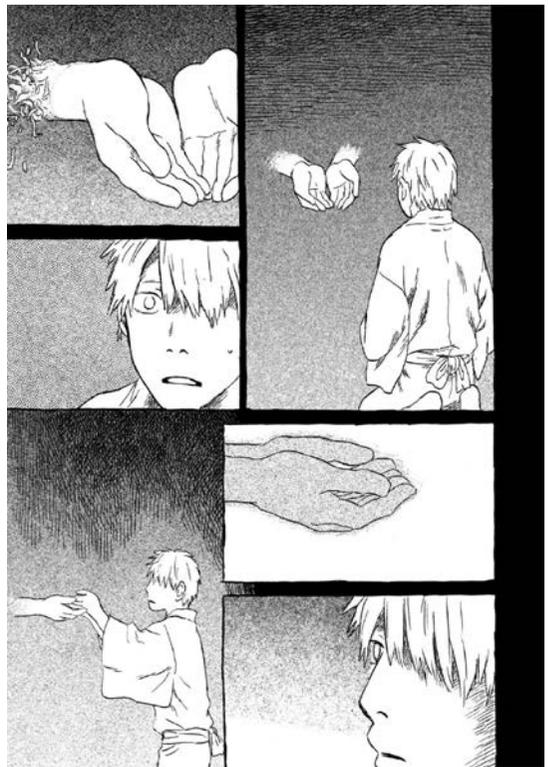
時ギンコの目に巣くうトコヤミが暴れだす。その後、「理」から帰ることを許されたギンコは、スグロにすべてを話し、自分自身の旅路を歩み始める。

「眇の魚」は、まさしく「ギンコ」の生まれる話であり、ギンコという人物の出自が描かれている。この話において重要なのは、ギンコがトコヤミの中へと飲まれたことで、ギンコの目にトコヤミが住み着いているということである。後の章で論じるが、このギンコとトコヤミの関係性が思想において重要な役割を果たしている。

また、「眇の魚」がギンコの生誕の話であるとすれば、「草の茵」はギンコの人形形成、蟲師としてのギンコを形作った話と言えるだろう。「眇の魚」以降、生来の蟲を寄せる体質に合わせ、トコヤミが巣くっているという状態にあったギンコは一つの場所に留まらず、人間関係も構築できずにいた。そんな中でギンコが感じるのは孤独、どこにも自分自身の居場所がないという疎外感であり、「草の茵」の冒頭においては、やさぐれた性格になっていた。それ故に、一つ所に留まり、山を統制するという自分自身とは対照的なヌシの力に惹かれてしまい、結果的にヌシの卵を割ってしまうのである。

しかしながら、『蟲師』の世界そのものであり、世界のルールともいえる「理」がヌシの卵を受け取り、ギンコに対して元の世界へと戻る事を許したこと、その後、スグロより言われた言葉を受けてギンコは考えを改めるようになる。「理」は、作中においては詳しい説明は無いものの、「ヌシが地表に現れる花ならば理は根である」と例えられているように、この世界の仕組みを形作る存在として描かれている。

「もう二度とお前には会わん……だが…忘れるな」「この世に居てはならない場所など誰にも無い」「お前もだ 理に戻る事を許されたんだ」「この世のすべてがお前のいるべき場所なんだ」
 (「草の茵」よりスグロのセリフを抜粋)



上に抜粋したのは「草の茵」の最後、理から戻る事を許されたギンコがスグロと再会し、何があった



光脈の前で「理」と出会うギンコ
(「草の茵」より引用)

のかを話した後のシーンである。スグロは山に住み、村の人々に助言を与える蟲師という立場上、ヌシの卵を割ったギンコを許すわけにはいかない。だが、それを踏まえたうえでギンコが抱えていた「自分自身の居場所がない」という悩みに寄り添い、この言葉をかけたのである。このスグロから教わった「誰にでも居場所がある」という発想がギンコの考え方のベースになっているとともに、世界そのものである理から戻ること(＝人として生きていく事)を許されたという体験があったことで、この世界に対する信頼、畏敬が深まったと考えられるだろう。

蟲もまたこの世で生きる生命、ギンコから言わせれば、「蟲にもまた居場所がある」ということであり、居場所を勝手に奪うような行為、すなわち殺すことを避ける思想はここから生まれているのだろう。

Ⅳ. ギンコの思想

前の章では、ギンコの幼少期を紹介し、ギンコの思想の背景の一つである「誰にでも居場所がある」という考え方を説明した。本論文最後となるこの章では、ギンコの思想を形作るもう一つの柱、「ギンコの蟲との距離感」について論じていく。

Ⅱ. 蟲にまつわる人々の章で、蟲の影響を受けた人がそれぞれ、蟲との距離感が遠すぎる、もしくは近すぎることで問題が生じるということ、またギンコの蟲との距離感が蟲との付き合いにおいて最適であると述べたが、なぜギンコはこの距離感に至ったのだろうか。前の章で挙げた「眇の魚」の通り、ギンコもまた蟲に影響を受けた人の一人であり、実際それによって自分自身の居場所を無くし、やさぐれた性格となっている。スグロからかけられた言葉によって考え方が改められたのは間違いないものの、これによる変化は「蟲を殺さない」という部分だけに本来留まるのではないだろうか。

旅路における「蟲に対する親しみ」、これが何から生じているのかを明らかにすることでギンコの思想もまた明らかになるのではないだろうか。

そこで考えられるのが、ギンコの中にあるトコヤミという存在である。

トコヤミは「眇の魚」の一件以降、ギンコの中に巣くっている蟲であり、トコヤミがいることで自分自身の居場所が作れずに疎外されてしまうことから、ギンコにとっては「草の茵」で「理」に会うまで、悩みの種であった。

だが、このトコヤミの存在がギンコの思想に大きな影響を与えるのである。それは先ほども挙げた「草の茵」の終盤、今の代のヌシが光脈へと入っていくのを見て、ギンコが自分も入ろうとするシーンである。

……たぶん、あそこは行ったら戻れないところだ
……でもかまわない もともと俺に居ていい場所なんてないんだ……
(ズキンとトコヤミの巣くう目が痛みだす)
「うあ……っ」トコヤミが暴れている——
「……やめろ……！ なんてお前は……おれの邪魔ばかりするんだ……」
……そうか お前 生きていたいのか——

(「草の茵」より抜粋)

光脈は蟲の生まれるところでもあるが、そこに入れば人としての生を終えて、蟲として生きるほかなくなってしまう。また、トコヤミも蟲であるものの、光脈に入れば「トコヤミ」としての生を終えることとなる。自暴自棄となったギンコは、それでも構わないと進もうとするが、そこで目の中に巣くうトコヤミが暴れだす。最初は、また自分の邪魔をされたと怒るギンコであったが、その時、トコヤミもただ生きていだけであると察する。

自分自身の居場所を持たず、誰からも必要とされていないギンコは、自分自身の存在意義について見失い、生きる意味や自分が生きている価値を見出せずにいた。そのような状況下におけるギンコの願いは「ただ生きていたい」ということ、そして、自分が「生きていていいと誰かから認めてもらうこと」である。

そのような願いをトコヤミもまた持っていることを知ったギンコは、自分自身とトコヤミという「蟲」を重ねたと考えられる。つまり、このシーンにおける、「そうか、お前生きていたいのか」というギン



コ言葉は、自分にとって邪魔なトコヤミが生きることを望んでいると知ると同時に、お前「も」生きていたいのかという自身とトコヤミの願いの一致に気づいた言葉なのではないだろうか。

ギンコにとって蟲は、生命として至極当然な「ただ生きていたい」という同じ願いを持つ存在であって、そこに人間との差異は無いのだろう。お互い「理」に許された存在として、同じ世界を共有する住人同士なのである。

この蟲を体に宿しているという点がギンコの思想を形作るもう一つのポイントだと考えられる。それは、作中では数少ない、ギンコと同じ思想を持つ人物、狩房探幽もまた蟲を体に宿しているからである。そこで、狩房探幽とギンコが会おう「筆の海」を取り上げ、ギンコとの共通点を見ていきたいと思う。

巻2-2 「筆の海」

大昔の大天災の時に現れ、すべての生命を消そうとしたとされる禁種の蟲を自分の身に封じたことで全身墨色となった女性、封じた蟲は体内で生き続け、女性は出産後命を落としてしまう。そして、その女性を先祖に持つ狩房家では何代かに一人、体の一部に墨色のあざを持つ子が生まれるのである。禁種の蟲は未だに生きており、狩房家では代々あざを持つ人が様々な蟲を殺した話を聞き、文書に残すことであざに巣くう禁種の蟲を少しずつ眠らせてきたのであった。

4代目の「筆記者」となる女性、狩房探幽はその使命を果たすため幼い頃から蟲師を家に招き、蟲を殺した話を聞いては記していたが、繰り返し聞く中で「蟲という微小で下等な生命への傲り」や「異形なモノたちへの理由なき恐れが招く殺生」などを蟲師から感じてしまい精神的な苦痛を負っていた。そんな中、狩房家のうわさを聞き付けたギンコと出会った探幽は蟲を殺す話はもうたくさんだと追い返そうとするが、そのまま蟲を殺さない話を喋りだすギンコを見て、驚きながらもひさしぶりに心安らぐ時間を過ごすのであった。

狩房探幽もまたギンコと同様に、蟲に親しみを持

つ人物であり、「筆の海」では、蟲を殺す蟲師たちから感じられる傲りなどで嫌気がさし、蟲を殺す宿命を背負いながら、蟲を殺さない方法もまたないのかということを考える珍しい人物である。

そして、ギンコと狩房探幽の共通点が体に蟲を宿しているということである。「眇の魚」にてヨキからギンコになった際に、ギンコもまたトコヤミが目にも巣くっている。つまり、ギンコも狩房探幽もその生まれから、蟲と切っても切れない関係であり、蟲が身近なものとして存在しているということだ。それゆえに他の蟲師にとって世界に棲み付く奇妙な隣人である蟲は、二人にとっては暮らしを共にする同居人なのである。蟲を自らの体に宿しているという密接した物理的な距離感、しかし、これは先ほど挙げた「旅をする沼」の少女の様な蟲によって居場所、生きる理由を与えられて蟲に依存するという「近い距離感」とは異なり、自分自身と蟲がそれぞれ独立したものとして生を全うしている形である。そして、蟲もまた一つの生命として同じ願いを持っている「理」に許された住人だと考える、蟲との精神的な距離感。これらの距離感がギンコや狩房探幽の思想に大きな影響を与えているのだと考える。

おわりに

以上の考察から、『蟲師』におけるギンコの蟲と親しみ、蟲を生かそうという思想は、誰にでも居場所があり、それを奪うことはしないという考え方の下、蟲もまた、ただ生きていたいという人と同じ願いを持つ対等な存在として認めていることで生まれていると言える。実際、ギンコは蟲を弱い存在として考えることは無い。作中においても、蟲を決して侮らず、細心の注意を払い、蟲を利用して悪事を働くものには厳しい言葉をぶつける姿が描かれている。そして、そこからさらにつながるのは、「自然」、作中で言えば「理」やヌシに対する畏敬の念である。自分自身が助けられた経験とともに人、蟲、様々な生命の生の全うを許し、世界のルール、世界そのものとして存在する「理」に対して、ギンコは絶大な信頼を置いている。「理」が許し、居場所を与えている、だからこそ蟲も対等な存在として認め、その

命を奪うことを許さないのだ。それゆえに、各話の終わり方として、ありのまま、自然のまま（＝「理」のまま）が一番であると締める話も多い。

本論文では、漫画『蟲師』における主人公であるギンコの思想とその背景について、各話の内容から考察した。そして、それらが世界そのものと言える「理」に対する畏敬の念、言い換えれば『蟲師』流の自然崇拜があることで成立しているというのが私の論であるが、作品内において「理」に対する情報は少なく、「理」という存在が『蟲師』において、どういう役割に当たるのかは明確には分かっていない。また、蟲という人に益も害も与える存在とそれを統制するヌシ、それらと対話し調整を図る蟲師という構図は、日本古来のもの神とシャーマンの構図に近いものの、そこで『蟲師』における「理」が何に当たるのかという問題なども残されており、作品内の物語、内容的な部分では考察を深め、問題であったギンコの思想とその背景について結論を出せたが、『蟲師』における構造的な部分の考察までは不十分であったため、そこは今後の課題としたい。

参考文献

- 漆原友紀 『蟲師』 講談社 全10巻
アフタヌーン編集部（編）『蟲師 Official Book』 講談社
西嶋雅樹 「漫画『蟲師』にみる心理学的イメージについての考察」 甲南大学学生相談室紀要 2010年
『日本国語大辞典』
『国史大辞典』

注

- ¹ 2023年1月現在、カラー再版となった愛蔵版が出版されているが、本論文では2000年より出版されていた単行本を用いる。
- ² 以後、作品名を指す場合は『蟲師』と表記し、作品内に登場する職業については蟲師と表記することとする。
- ³ 単行本1巻「あとがき」より
- ⁴ -の前の数字は巻数、後ろは各巻の何番目の話かを表している。
- ⁵ 作中では、遙か地の底、闇の中に「光酒」と呼ばれる光り輝く命の水であり小さな蟲の群れが流れている。これを光脈と呼び、この光脈の通り道は「光脈筋」と呼ばれる。光脈筋に近い土地は緑が生い茂り、豊かに自然が栄えるが遠ざかると枯れてしまう。
- ⁶ 光脈筋に当たる山は精気が強すぎるため、それを抑えて山全体を統制する存在が必要となる。それがヌシであり、様々な動物がヌシとして描かれている。